



見捨てられた万能者は、 やがてどん底から成り上がる 3

α L P H α L I G H T

グリゴリ
Gurigori

アイリ

魔法が得意な「賢者」。
「銀狼の牙」の
ムードメーカー。

ベロニカ

没落した貴族家の長女。
借金を返済するため
冒険者をしている。

マルティ

「銀狼の牙」に
所属する「聖女」。
優しい性格だが、
怒らせると怖い。

五つ子狼

レイアの子供達。
性格も能力もバラバラだが、
みんなお母さんが大好き。

レイア

めす
雌のシルバーフェンリル。
オークに襲われている
ところをクロードに
助けられた。

ナビー

クロードの参謀役の
女の子。元はレベルアップ
を告げるだけの
概念だったが、
彼に体を与えられた。

クロード

本作の主人公。
超器用貧乏なジョブ
「万能者」である事を
理由にパーティを
追放された。

MAIN CHARACTER

登場人物紹介

第一章 王城パーティーとスタンピード襲来編^{しめうつらいへん}2

クロードがクリエール王国最強のSランクパーティー『銀狼の牙^{ぎんろうのしや}』を追放され、二年あまりが経過した。

彼が追い出される理由となった超器用貧乏なジョブ『万能者^{ばんのうしや}』。これは一定の動作を複数回行う事でスキルや魔法を習得出来る特別なジョブだった。

クロードは『万能者』を進化させ、さらなる力を身に付ける。

そして、シルバーフェンリルのレイアやその子供である五つ子狼達^{おと}、レベルアップアナウンスが肉体を得た存在である少女——ナビーといった頼れる仲間と共に、冒険者パーティー『天の祝福^{てんのしよくふく}』を結成。

各地で活躍してAランクパーティーとなり、勇者パーティーの候補^{こうほ}となったのだった。

ところが、勇者パーティー候補として王城のパーティーへ招かれた『天の祝福』のもとに、モンスターの大群^{たいぐん}が四つのダンジョンを出て王都に迫っているとの急報が舞い込む。

『銀狼の牙』のリーダーだったシリウスが捕まり、彼の『魅了の魔眼^{みりょうのまがん}』による支配を解か

れたかつてのパーティーメンバー、ケイト、マルティ、アイリと一緒に、クロードは王都の窮地を救うべく動き出したのだった。

王城の会議室を出たクロードは、五つ子狼達を亜空間から出し、『銀狼の牙』の面々に紹介した。

現在、王都には東西南北全ての方角からモンスターが迫ってきており、『天の祝福』、シリウスが抜けた『銀狼の牙』、そして王国の騎士団と魔法師団で撃退していく事になる。夜を徹しての戦いになるだろう。

クロードはそれぞれの配置に就く仲間達と別れ、レイアと五つ子狼の一匹、ボロを連れて担当場所へ向かっていった。

クロード達が南門に着くと、既に到着していた騎士団と魔法師団の兵士達が慌ただしく働いていた。王都の外から順に第一、第二、第三の防衛ラインを敷き、南門を最終防衛ラインとするつもりのようなのだ。

クロードは南門防衛の責任者達がいるという天幕に向かった。

責任者の代表は第三騎士団の団長だ。

クロードがどこでモンスターの大群を迎え撃てば良いか聞くと、男は面倒くさそうな顔をした。

「おお、これは、これは、小汚いお邪魔虫の冒険者とその従魔ではないか。やれやれ、今回の討伐戦、我々騎士団と魔法師団だけで事足りるというのに、こんな冒険者に救援を頼むなど……国王陛下はいったい何を考えておられるのか。私には理解出来んよ」

嫌味を言い、南門の指揮官はさらに続ける。

「おっと、どこに行けば良いかだったな。お前達は我々エリート of 邪魔でしかない。この最終防衛ラインである南門の端っこで、指をくわえて我々の雄姿を見ているが良い。ではまたな」

南門の指揮官は、クロード達を天幕から追い出した。

『あの者は何様のつもりなのでしょう。わたくし達は国王に頭を下げられたからこの戦いに参加するというのは、あまりにも失礼な態度です。それにどうでも良い事です、国王の事も馬鹿にしていると思います。主様もそう思いませんか？』

「そうだね。あの物言いはいささか不愉快だね。まあ良いさ、最初は彼らだけで戦っても

らおう。彼らの実力ではモンスターの大量を抑えきれないだろうから必ず助けを求めてく
ると思うし、それまでは高みの見物という」

『念話』を使って怒りを伝えてくるレイアを宥めながら、クロードは南門の端に移動した。
『はあ、みんなのところはどうなっているでしょうか。わたくし達と同じ対応をされて
いないと良いのですが。特に東門の防衛を担当するマールさんなんかは、あんな態度を取
られたらもう戦わないなんて言い出しそうです』

『はは、まあ大丈夫じゃないかな。向こうの指揮官は騎士団長だから、この指揮官のよ
うな尊大な態度は取らないと思う。さあ、俺達の出番が来るまでテントの中で寛いでい
よう』

クロードはテントを取り出し、中に入る。

『さあ、ボロもテントに入りますよ』

『はい、ママ。主様、オレ、お腹が空いちゃった。中で何か食べて良い？』

『そうだね……俺達の出番が来るまでそれ程時間はかからないと思うから、何か簡単な物
でも作ろうか』

『やった。じゃあ、早く早く！』

クロードがキッチンで軽食を作り始めると、魔法が着弾したかのような音が遠くから聞

こえてきた。

『お、どうやら第一防衛ラインで戦闘が始まったようだね。敵も王都まではまだ距離があ
るんだろう。よし、特製のオムレツが出来たよ。今のうちに食べちゃおう』

クロード達がオムレツを食べている間にも、戦闘音はどんどん大きくなっていく。次第
にモンスター達の雄叫びも聞こえてきた。

そんな中でもクロード達に動揺はない。

オムレツを食べ続けているとテントの入り口が勢いよく開き、あの失礼な男——南門の
指揮官が入ってきた。

彼は真っ直ぐクロードに近づき、料理を載せていたテーブルを蹴り倒した。そして命令
してくる。

『何を呑気にオムレツなんて食ってやがるんだ。さつさと外に出て最前線に行ってこい。
お前達のようなゴミに出来るのは、前線に立って我々エリート^{たち}の盾になる事くらいだろう
が。オラオラ、さつさとしないか』

先程とは真逆の事を言い、南門の指揮官はクロード達をテントから追い出した。辺りを
見回して、口元をニヤリと歪める。

南門の指揮官はテントを出ると、クロードに言い放った。

「このテントは中々の品のようだな。お前には勿体ないから、エリート中のエリートであるこの私がもらってやろう。ありがたく思うと良い」

そう言ってテントを奪うと、南門の指揮官は天幕へ戻っていった。

クロードとレイア、ボロは一般の兵士達に連れられて、第二防衛ラインにやって来た。空には月が昇っているが、魔法でそこかしこに明かりが灯されている。

そこから見える第一防衛ラインはまさに地獄絵図で、至るところに兵士の死体が転がっていた。そして、遺体を踏みつけながらモンスターが進軍している。

「これはまた凄い有様だな。最初っから俺達を戦場に出しておけば良かったのに、自分達だけで戦功をあげたいって欲張るからこんな事になるんだよ。はあ、この戦いが終わった後が面倒くさそうだな。あの指揮官、絶対に何か言ってくるに違いない。俺達がモンスターを倒したって、どうせ自分の手柄にしようとするだろうしね。はあ……」

『主様のおっしゃる通り、本当に人間って面倒くさいですね。あ、南門を飛び出して、誰かが走ってきますよ。こちらに手を振っていますが、誰でしょうか？』

「んん、本当だ。誰だろ？ 見た事がない女性だけど」

クロードとレイアがそんな話をしているうちに、見知らぬ女性は第二防衛ラインまで



やって来た。そのままクロードに駆け寄り、声をかけてくる。

「お久しぶりです、クロードさん。二年程前に王都で顔を合わせて以来ですね」

「ええ？ あなたとは初対面だと思いますが……」

「ああ、あの時は変装をしていたんです。ちょっと待っていてくださいいね」

謎の女性が右手の中指に指輪をはめた。すると、外見がみるみるうちに変化していく。

やがて女性は、追放されたクロードの代わりに『銀狼の牙』に加入した男——アレックスの姿になった。

「え、えええ!? ア、アレックスさんですよ？ で、でも今さっきまで女の人だったのに。え、どういう事、いったいどうなっているんだ？」

混乱のあまり頭を抱えて唸るクロードに、アレックスが事情を説明する。

「私は王国の諜報機関に所属している諜報員なのです。『銀狼の牙』が勇者パーティ候補として相応しいか見極めるため、かつての私は国王陛下の命でパーティに潜入する事になりました。クロードさん、あなたと入れ替わる形でね。しかし、迷宮都市ゴルドで、リーダーのシリウスにパーティから追放されてしまいました」

そこで一度言葉を区切り、アレックスは頭を下げた。

「私はケイトさん達がシリウスの『魅了の魔眼』に洗脳されている真実を知りながら、何

もしやあけられませんでした。そしてクロードさん、あなたにも。シリウスからあなたを追放する計画を聞かされていたにもかかわらず、真の目的のために利用してしまったのです。スキル『魔眼』シリーズには隠蔽効果が存在します。彼が本当に『魔眼』持ちなのか、確かめるのに時間がかかってしまつて。上司に相談しつつ、ケイトさん達を救うためにどう動くべきか悩んでいるうちに、パーティを追い出されてしまい……」

「そうだったんですか」

クロードがアレックスの話に聞き入っていると、レイアが割り込んできた。

『あの、お話し中のところ申し訳ないのですが、モンスターの大群がこちらに迫ってきております。いかがいたしましょうか』

レイアに促されてクロードとアレックスが前方を見ると、モンスターの大量があと数百メートルの距離まで迫っていた。

「アレックスさん、話はまた今度にしましょう。まずはモンスター達を一匹残らず殲滅しない」と

「そうですね。それと、私の本当の名前はエルリナと言います。これからはそちらで呼んでください、クロードさん」

アレックス改めエルリナは、中指にはめた指輪を外して女性の姿に戻った。

クロードとレイア、ボロは兵士達の支援に向かったエルリナと別れ、一万は下らないらしいモンスターの大群に向かっていった。

クロード達がモンスターの大群と相対していた頃――

龍王国の元女王で現在はクロードの従魔であるエンシントドラゴンのマルルは、五つ子狼のレイ、『聖女』のジョブを持つマルティと共に、東門の最終防衛ラインからモンスターの大群を観察していた。

「わたくし、これだけの数のモンスターを見るのは初めてですわ。『一万体はいる』と聞きました、こんなに多いんですのね」

マルティは唾を呑み込み、緊張した様子で言う。人化していたマルルがその眩きに答えた。

「マルティ、お主が緊張するのも当然の事。わしでさえこのような大群を見たのは、三百年以上生きてきて一度だけじゃ。その時はBランク以下のモンスターしかいなかったが、今回はAランク以上の高ランクモンスターもちらほらと見て取れる。ちと気合を入れて事

に当たらないといけないかもしれないのじゃ」

二人がモンスターの大群を見ながら話していると、天幕から東門の指揮官である騎士団長がやって来た。

「マルル殿、マルティ殿、今回の討伐作戦にご協力いただき、誠にありがとうございます。正直に申しまして、あれ程の数のモンスターは我々騎士団と魔法師団では対応しきれないと考えております。あの大群の多くをあなた方に任せてしまいう事になりますようが、何卒よろしくお願いいたします」

「うむ、わかったのじゃ。わしも味方が散らばっていない方が大技を撃てるというもの。初撃はわしがブレスを放つ。それだけであの大群の半分程は消し飛ばす事が出来るはずじゃ。残りの半分はわしとレイでゆっくり倒して回るとするか。騎士団と魔法師団は討ち漏らしたモンスターの討伐を、マルティはわしとレイ、兵士達の回復を任せる。心してかかるのじゃぞ」

「はい。皆様の手伝いは、わたくしにお任せくださいまし」

「うちもいっぱいモンスター倒してくるから、戦いが終わったら頭を撫でてくれる？ マルティ」

レイが口を挟むと、マルティは首を傾げた。

「わたくしでよろしいのですか？ クロードさんに撫でてもらった方が、レイさんとしては嬉しいんじゃないやありませんの？」

『勿論そうだけど、マルティにも撫でてもらいたい。それと、もう一つ。この戦場に来るまでの間に、うちの事はレイちゃんと呼んで言ったじゃん。ちゃんと呼んでくれないと、うち、怒っちゃうよ』

「わかりましたわ。それじゃあ、攻撃はマールさんとレイちゃんにお願いしますわね」

「うむ、任せるのじゃ」

『うん。ドンと任せてよ』

マールとレイは、モンスターを蹴散らすべく第一防衛ラインに向かって歩き出した。

クロード達とマール達がそれぞれ王都の南門と東門でモンスターを迎え撃っていた頃、時を同じくして西門でも防衛戦が始まろうとしていた。

西門の第二防衛ライン。

騎士団駐屯地にある会議用の大天幕には、クロードの幼馴染であり『剣聖』のケイト、

『天の祝福』の一員であるペロニカ、五つ子狼のリサの姿があつた。

西門の指揮官である魔法師団長が、ケイト達に作戦を伝える。

「それでは、ケイト殿、ペロニカ殿、大物はあなた達にお任せする事になる。必然的に最前線で戦ってもらう事になるが……我々魔法師団も騎士団も最善を尽くそう。王都を守るため、どうかよろしく頼む」

魔法師団長は深々と頭を下げた。

「団長殿、頭を上げてくれ。私達はこれから共に戦う戦友だ。そのようにかしこまられては困る。こちらにはそういう態度に慣れていない者もいるからな」

ペロニカはそう言くと、自分達のそばで大人しくお座りして話し合いが終わるのを待っていたリサを見た。

魔法師団長はペロニカの視線を追ってリサを見て、そのあまりにも可愛らしい姿についての疑問を口にする。

「そ、その……先程から控えているウルフは、本当に強いのか？ この可愛い見た目からはとても想像がつかないのだが、戦場に出しても大丈夫なのか？」

すると、今まで黙っていたリサが声を上げた。

『あたくしの愛くるしさを理解出来た事は褒めてあげる。けど、あたくしの強さを疑われ

るのは、大変心外ですわね。まあ、その間違った認識も、数分後には覆くつえっているのですしうけれど」

それだけ言い、リサは頬ほを膨ふくらませてブイツとそっぽを向いてしまう。

「ははは、どうやら怒らせてしまったようだな。そこまで言うのなら実力を信じよう。それでは、ケイト殿、ベロニカ殿、そしてリサ殿、改めてよろしく」

魔法師団長は苦笑くしやうすると、外で待機している部隊に指示を出すべく天幕を出ていった。

場所は変わり、王都の北門防衛ラインの最前線。そこには、共に戦う者達に指示を出しているナビーと『賢者』のアイリ、その手伝いをする五つ子狼の二匹——イリアとハロがいた。

「その魔法士と騎士、ちょっとこっちに来てちょうだい」

アイリが近くにいた魔法士と騎士に声をかける。声をかけられた二人は「いったいなんなんだ」と怪訝けげんな顔をしながら、アイリのそばにやって来た。

一人が尋ねる。

「お呼びでしょうか、賢者様。なんなりとお申し付けください」

「ええ。あなた達がここの指揮を執る隊長達……という認識で合っているかしら」

「はい」

「そう。それじゃあ、各部隊の隊員達に伝えておいてもらいたい事があるの。開戦して直ぐ、ナビーがあなた達に攻撃力上昇、防御力上昇、速度上昇、魔力強化の支援魔法をかけるわ。たまに急に自分が強くなった事に驚おどろいてパニックを起こっちゃう人がいるから、ちゃんとやっておいでね」

「はい。わかりました。ただちに隊員全員に通知いたします」

隊長達は頷うなずき合い、急いでその場を去っていった。

伝達を終えたアイリとナビーは、イリアとハロを連れてこれから戦場となる平原を一望する事が出来る第三防衛ラインの高台まで下がった。迫り来る一万ものモンスターの大群を観察する。

ナビー達が戦場の様子を窺うかがい始めてから三十分程が経過した頃、平原の奥の方で土煙つちけりが見えた。

走ってきた偵察班ていさつはんの隊員は、モンスターの大量が第一防衛ラインに近づいてきた事を報

告する。

「わかりました。では、手筈通りにいきましょう。各部隊に戦闘準備をするように伝えてください」

「はっ、承知しました」

ナビーは報告に来た偵察班の隊員と近くにいた騎士に指示を出し、支援魔法の発動準備に取りかかった。

やがて、最前線の騎士達がモンスターの大群に向かって駆け出していく。魔法師団の魔法士はモンスターに攻撃魔法を撃ち込むべく、構えを取った。

ナビーはそんな彼らに一斉に支援魔法をかける。

騎士団と魔法師団全員にバフをかけ終えたナビーは、アイリとイリア、ハロを連れて第一防衛ラインを指して移動を開始した。

あつという間にナビー達は目的地に到着した。

そのまま最前線に突っ込んでいくナビー、イリア、ハロと別れ、アイリは魔法師団に合流する。そして、モンスターの大量目がけて攻撃魔法を放つ。

「第三魔法部隊、あなた達だけ前に出すぎているから周り足並みを揃えて。第二魔法部

隊と第五魔法部隊は、最前線で戦っている騎士達にさらに支援魔法をかけてちょうだい。

その他の部隊は攻撃魔法を継続して撃ち込みつつ、騎士達の援護をなさい。では、行動開始！」

アイリの指示を受けた魔法士達は、与えられた役割を果たすために各自準備に取りかかった。

一方、最前線に向かったナビーとイリア、ハロは、モンスターの大群からおおよそ百メートル程の距離まで接近していた。

「イリア、ハロ、準備は良いですね？」

「ええ、いつでも突っ込めるわよ」

『おいらもいつでも行けるよ。戦闘支援はおいらに任せてよ！』

「ええ、お二人ともよろしく願いますね。では、参りましょう」

ナビーとイリアを前衛に、後ろをハロが追従する形でモンスターの大群へ近づいていく。まず、ナビーはオリハルコンの剣に、イリアは自らの爪に少量の魔力を纏わせた。そして魔力の性質をナビーは火に、イリアは風に変えて、大群の最前列にいるモンスター達を切りつける。

ナビー達が放った火と風の斬撃は融合し、巨大な炎の竜巻となってモンスターの群を襲った。

炎の竜巻は次々とモンスター達を吸い上げて塵へ変えていく。

ナビーとイリアがモンスターを蹴散らす隣では、ハロが土魔法の『アースウォール』を発動して周囲の守りを固めていた。敵の攻撃をかくぐり、ハロはナビー達に襲いかかるうとするモンスターを岩魔法の『ロックバレット』で的確に撃ち抜いていく。

「あら、初動は中々良い感じですね。イリア、これから群れの中に突っ込みますが、準備は良いですか？ ハロは今まで通りに土魔法と岩魔法でサポートを行ってください。攻撃は余裕があったらで構いませんからね」

「ええ、わかったわ。私のこの爪でモンスターどもを蹴散らしてあげるわ」

「うん。おいらも頑張っちゃうよ！」

「ええ、二人とも頼りにしていますよ。では、突撃します！」

『わかった（わ）』

真っ先にモンスターの群れに飛び込み、ナビーはオリハルコンの剣を振るう。イリアは自慢の鋭く頑丈な爪と牙で、群れの先頭にいるモンスターに飛びかかった。ウルフ系、ボア系、ベア系の低ランクモンスターを蹴散らしていく。

ハロは二人の背中を守りながら、自らも魔法と爪、牙を使って適度にモンスター達を倒していった。

ナビー達が戦う一方で――

魔法師団と共にモンスターを後方から攻撃していたアイリは、魔力がすっからかんになっていた。肩で息をしながらも手持ちの魔力回復ボーションを何本も飲み、なんとか魔力を回復させる。

そして、後方を魔法師団に任せ、前線に向かったナビー達と合流する事にしたのだった。

「ナビー達、だいぶ暴れたわね」

最前線には色々な種類のモンスターの屍が至るところに転がっていた。

「とりあえず三人と合流しないと」

アイリはモンスターの死体が転がる戦場を歩き、ナビー達を探す。

しばらく進むと、遠くの方から戦闘音が聞こえてきた。

「音がするのは……こっちかしら？」

アイリはだんだんと大きくなる戦闘音を頼りに、ナビー達の居場所を探る。

やがて多くのモンスター達に囲まれながらも、何者かが戦っている光景が見えてきた。

「ちょっと遠目にはわかりにくいけど……たぶん、あれがナビー達ね」

ナビーと思われる人影を目視したアイリは、自身の足に風魔法の『ウィンド』をかけてその場に急いだ。

ナビーとイリア、ハロはここまでの激しい戦闘によつて魔力枯渇状態に陥りながらも、今なお必死に戦っていた。

「はっ、はっ……ちょっと最初っから飛ばしすぎてしまいました。そろそろ後方に下がって魔力を回復したいところですが、そのためには私達を囲むモンスターの包囲網をどうにかしないといけません」

ナビーが自分達を囲い込んで殺そうとするモンスター達をどうやって突破するか考えていると、視界の端にハロに攻撃を仕掛けようとしている数体のモンスターの姿を捉えた。

ハロはどうやら背後のモンスターに気付いていないようだ。ナビーが慌てて危険を伝えようとした瞬間、突然強風が吹き、ハロの後ろにいた敵を空中へと舞い上げた。そこに大量の風の刃が殺到し、モンスターを切り刻む。

ナビーは突然の出来事に驚き、咄嗟に自分の背後を振り返った。するとそこには、苦しそうにお腹をさすりつつこちらへ歩いてくるアイリがいた。

「ア、アイリさん、応援に来てくれたんですね。危うくハロが怪我をしてしまうところだったので、助かりました。ありがとうございます。それで……そんなに苦しそうにお腹をさすってどうしたのですか？」

ナビーが心配そうな顔をして聞くと、アイリはばつの悪そうな顔をして口を開く。

「後方で魔法を撃ちまくっちゃって……魔力回復ポーションでお腹いっぱい、気持ち悪いのよ。ぶっちゃけて言うと、今にも吐きそうなくらい」

アイリは苦笑いを浮かべた。そしてこちらを攻撃しようと窺っているモンスター達を一瞥し、ナビーとイリア、ハロに話しかける。

「……ってわけだから、お腹に溜まったポーションを消化するためにも、この場は私が引き受けるわ。だから、今のうちに魔力を回復してきなさい。そのくらの時間稼ぎなら、私一人でも余裕だから」

「そうですか。それではお言葉に甘えさせていただきます……アイリさん、あまり無茶はしないでくださいね。危ないと思ったら躊躇わず、直ぐに引いてください。私達も急いで戻ってきますので」

「ええ、わかったわ」

「わふわふ」

鳴き声を上げたハロとイリアを見て、アイリは首を傾げる。

「この子達、今なんて言ったのかしら？」

「……『アイリお姉ちゃん、気を付けてね』って言っていますよ」

「そうなの。ナビー、『心配しなくても大丈夫よ』って通訳してくれるかしら？」

「その必要はありません。この子達は言葉を理解していますから、アイリさんの言葉はちゃんと伝わっていますよ」

「それなら良いわ。さあ、早く行きなさい」

アイリにこの場を預け、ナビー達は後方へ下がっていった。

最前線に一人残ったアイリは、ナビー達がここに戻ってくるまでの時間を稼ぐため、あらゆる魔法を駆使して戦っていた。

「それにしてもキリがないわね。いったいあと何体いるのよ、モンスターは……魔法をいくら撃つても絶え間なく湧いてくるし」

そうばやきながらも、アイリは懸命に攻撃魔法を撃つ。

「はああああ……『フレイムゲイル』！『ロックブラスト』『ウィンドカッター』！『ブリザードストーム』!! はっ、はっ、やばいわね。また魔力が枯渇しそう。ナビー達

はまだかしら？」

魔力枯渇が間近に迫り、アイリは初級火魔法と初級風魔法を組み合わせた複合魔法『ファイアウィンド』を使ってから十数分後。いよいよアイリの魔力が枯渇するかと思われたその時、遂に待ちに待った人物が現れた。

「お待たせしました、アイリさん、おかげさまで魔力も体力も十分に回復出来ました」

「やっと戻ってきたわね、あなた達。私は魔力が尽きたから、また魔力回復ポーションを飲んでくるわ。魔力が回復したら直ぐ戦闘に戻るから、あなた達で先に戦っていてちょうだい」

「わかりました。あまり急がなくて良いですからね」

ナビーはアイリを気遣うと、イリアとハロを連れてモンスターを薙ぎ倒していった。

魔力回復ポーションを飲み、アイリは直ぐに戦闘に復帰した。色々な中級の攻撃魔法を駆使し、残りのモンスターを駆逐していく。

四人の活躍で、北門を目指していたモンスターの大量は掃討された。

「ふう、やっと終わったわね。途方もない数のモンスターだったわ」

「ええ、全くですね。少し休んだら、手分けして他のところを手伝いに行きましょう」

「そうね。どこに行こうかしら」

「私とハロがケイトさんのいる西門に向かいます。アイリさんは、イリアと一緒にマールさんのところ——東門へ行ってください」

「わかったわ。でも、クロードがいる南門に加勢しなくて大丈夫？」

「マスターなら平気ですよ。とても強いですから」

ナビーがそう答えた時だった。

ナビー達のそばで休んでいたハロとイリアの体がまばゆい光に包まれる。

「こ、これは、どうしたの？ この子達は大丈夫なの？」

突然の出来事にパニックになり、アイリは慌ててナビーに聞いた。

「これは進化の前兆ですから、心配しなくて大丈夫です。それにしても、この子達はいったいどのような種族に進化するのでしょうか。とても興味深いです」

イリアとハロが輝き出してから数分すると、徐々に光が収まってきた。

そして光が完全に消えた後、そこにいたのは先程までとは全く異なる姿になったイリア

とハロだった。

イリアは体が二回り程大きくなり、体を覆うように風を纏っていた。強い風が土埃を巻き上げているが、不思議な事に直ぐ近くにいるナビーとアイリ、ハロには風の影響はない。また、進化前に比べると毛並みがやや緑みがかった。

ハロも進化前より体が大きくなり、額に巨大な一本の角が生えていた。毛の色も灰色に変わっている。

「あら、二人とも随分大きくなりましたね。なんて種族なのかしら？ 二人ともちよつと

『鑑定』しますよ」

ナビーはハロとイリアに『鑑定』をかけた。

【名前】ハロ

【種族】ガイアウルフ

【名前】イリア

【種族】テンペストウルフ

「ガイアウルフとテンペストウルフですか。聞いた事がありませんが、アイリさんは何かご存じですか？」

「ナ、ナビー、あなた何を言っているのよ!? どっちの種族もAランク上位の危険指定魔獣じゃないの! あなた達、とんでもない種族に進化したわね。まあ、味方なら心強いけど」

「あ」

鑑定結果を確認していたナビーが何故か目を丸くした。アイリは不安そうに尋ねる。

「ど、どうしたのよ。ナビー」

「あ、いいえ。実は、この子達が人化のスキルを獲得していたんです。だから驚いてしまっ……」

「え、本当なの? 良かったじゃない、あなた達」

「わふわふ」

イリアとハロは声を揃えて返事をした。

「ナビー、二人はなんて言っているの?」

「……『これでやっとアイリさんとお話しする事が出来るね』だそうです」

「ふふふ、そうね」

微笑むアイリを見て、ナビーはニヤツと笑う。

「……と、こうして通訳してみせましたが、本当は必要ないんです。この子達、最初から話す事が出来ますからね」

「え、そうだったの?」

「ええ、もともと『念話』が使えたので……アイリさん、からかわれましたね。さて、十分休みましたから、そろそろ移動しましょうか」

「そうね……それにしても私、からかわれていたのね。まあ良いけど。それじゃあ、また後で」

そして、ナビーとハロは西の戦場へ、アイリとイリアは東の戦場を目指して歩き出した。

西の戦場ではケイトとベロニカ、リサが最前線でドラゴンや巨人、獣などが混在するモンスターの群れと戦っていた。

前衛はケイトが担当し、ベロニカは盾役として敵の注意を引きつつ防御を担う。リサは遊撃としてあっちこちでモンスターの群れに大きな被害を与えていた。

「くつ、巨人種の攻撃が重すぎる。あたいだけじゃ、Bランクまでの巨人種の攻撃しか受けられない。それ以上のランクが出てきたら、押さえられないよ」

ハイトロールの打撃になんとか耐えながら、ペロニカは焦りを口にした。その時、突如として彼女の横を灰色の何かが通り過ぎていった。

次の瞬間、モンスター達が作っていた肉壁の一部が吹き飛ぶ。

突然の出来事に動揺したのか、ペロニカが押さえ込んでいたハイトロールに僅かな隙が生じる。

ペロニカはそれを見逃さず、ハイトロールに攻撃を仕掛けた。

「仕方ない。魔石は惜しいが、こいつの再生能力を上回る速度の攻撃はあたいたいじゃ出来ないからね」

ペロニカはハイトロールの胸の辺りにある魔石めがけて、躊躇いなく剣を突き入れる。

ハイトロールは直ぐに動かなくなった。

敵を倒したペロニカは先程自分の横を通り過ぎていった物体の正体を確認しようと、前方に目を凝らす。そこには、体長二メートル五十センチ程の灰色の体毛をしたウルフがたずんでいた。

「な、なんだ、あのウルフは。内包している魔力の量が半端ないぞ」

「あれはハロですよ。北門側での戦いを終え、ガイアウルフに進化したんです」

「ナビー!? 来てくれたのか。それにしても……ハロは王城で別れた時とは全く姿が違うな。まあ、変わらず可愛い顔立ちだが」

「ええ、そうですね。全てにおいて同意します」

ペロニカとナビーが話し込んでいると、ケイトとリサがやって来た。さらにハロも合流する。

ケイトが小声で尋ねる。

「ペロニカさん、この灰色のウルフはあなた達の仲間なのか? ……ん、ナビーさんもいるが、北の戦場はどうしたのだ?」

「ケイトさん達の救援に来たんですよ。北の戦場は制圧しました。それと、この子はハロですよ。イリアと一緒に進化したんです。イリアはアイリさんと東の戦場に向かってもらっています」

「そうだったのか。ハロ、警戒してしまってますなかった」

「別に良いよ。あまり気にしてないし、体毛や大きさが変わったら人間にはわからないものだしね」

「皆さん、話している暇はないみたいです。敵がまた前進してきました。C、Bランク

のモンスターはケイトさんとベロニカさん、リサでほとんど倒していたみたいですね。残りももうAランクばかりです。最後方から、モンスターではない何者かの気配を感じるのが不安ですが……皆さん、もうひと踏ん張りといきましょう」

群れの奥の方で控えていたAランク上位のモンスター達が前進を始める。それを目視したナビーが再び口を開く。

「皆さんの素のステータスでは、Aランク上位のモンスター達には力が及ばないと思います。だから、私が支援魔法をかけます」

「そうだね、ナビー。あたい達にあんたのありったけの支援魔法をかけてくれ。それでたぶん、なんとか出来ると思う」

ベロニカの分析で今後の方針が決まった。一行は早速行動を開始する。

ナビーは支援魔法の身体能力超上昇、攻撃力超上昇、防御力超上昇、素早さ超上昇を一人一人にかけ、能力値を何倍にも向上させた。各々がモンスターの群れに向かっていく。

「おお、なんとなく普段の三倍くらいまで力が跳ね上がった感じがするな。これならAランク上位どころか、Sランクモンスターもいけるんじゃないか？」

「ああ、ナビーの支援魔法はかなり効果的だからな。本当に彼女がここに来てくれて良かったよ。クロードの支援魔法がこれよりもっと凄いから、普段は震んでしまっている

んだ」

ケイトとベロニカはナビーの支援魔法の力を肌で感じながら、モンスターの群れへ突っ込んだ。

ケイトは愛剣、聖剣アロンダイトを握り、眼前に迫ったAランクモンスターを同時に五体も切り飛ばした。

「良いな。いつもよりも体がよく動く。支援魔法の有無でこんなにも違うものなのか」

ケイトはいつになく体が動かしやすい事が楽しくて、ついウキウキしてしまった。

(ナビーさんでこれなら、クロードの支援魔法はいいたいどれ程の効果を発揮するのだろうか。この先の人生で、私が彼に支援魔法をかけてもらう機会は果たしてあるのだろうか。今までクロードと一緒に旅してきたナビーさん達が少し羨ましいな)

そんな事を考えながら、ケイトはアロンダイトを中段に構える。そして、目の前に立ちはだかる一つ目の巨人……Aランク上位のモンスター、サイクロプスに切りかかった。

「はっ！ くっ、流石にAランク上位のモンスターだけあって頑丈だな。これは本気を出さないと勝てないか」

ケイトはサイクロプスから一度距離を取り、目を閉じて深呼吸をした。「『剣聖の舞』」と呟き、目をかっと思開く。

『劍聖』が持つスキルの一つである『劍聖の舞』を発動したケイトの周囲に、銀色のオーラが立ち上った。

オーラはアロンドイトをも覆い、切れ味と耐久力を向上させる。ケイトは再度サイクロプスに切りかかった。

両者が拮抗していたのは数分間だけだった。ケイトの剣がサイクロプスの脇腹を切り裂き、サイクロプスは大地に片膝をつく。

「よし、ここで畳みかける。聖剣術秘伝剣技『魔虎一閃』！ はっ！」

ケイトが『魔虎一閃』を繰り出したと同時に、アロンドイトを覆っていたオーラが黒き大虎の形に変化した。

そして片膝について動かないサイクロプスに襲いかかる。

黒き大虎が通り過ぎた後には、上半身と下半身を真っ二つにされて絶命したサイクロプスの姿があった。

アロンドイトを振り下ろし静止した状態のケイトが微笑む。

「ふっ、私のアロンドイトで切れぬものなし。は……今のかっこいいところ、クロードに見てもらいたかったな〜」

ケイトはそう吹き、次の獲物を求めてその場を離れた。

一方のペロニカは、まだまばらに残っているBランクのモンスター達を一体一体確実に倒していた。

その様子を取り巻きのBランクモンスター達の奥にいるAランク上位の獣型モンスター、ブラッドホーンヴァッフアローがずっと睨みつけてくる。

「あああああ、もうなんなのだ、あのブラッドホーンヴァッフアローは！ さっきからずっとあたいの事はかり睨んできて、鬱陶しい。あたいに何か恨みでもあるのか？」

ペロニカはブラッドホーンヴァッフアローの前にいたBランクのモンスターを全て倒すと、ミスリルの剣を中段に構え、ミスリルの大盾を前面に持つ。そして、ブラッドホーンヴァッフアロー目がけて駆け出した。

ブラッドホーンヴァッフアローはBランクモンスターであった弟を殺され、ペロニカに並々ならぬ恨みを抱いていた。

もちろん、ここが戦場だという事は理解している。戦場で死ぬのは仕方がない事も。しかし、理性では理解出来ていても本能は違う。

ブラッドホーンヴァッフアローは突っ込んでくる憎きペロニカを見て、攻撃を仕掛ける事にした。

雄叫びを上げ、ペロニカ目がけて突進する。

急な攻勢を避ける事が出来ず、ペロニカは咄嗟にミスリルの大盾を地面に突き刺して固定した。そして、大盾を両手でしっかりと握りしめブラッドホーンヴァッファローの突進を受け止めた。

「ぐおおおおお！ はっ、流石、上位のAランクモンスター。力が尋常ではないな。ナビーに支援魔法をかけてもらってなかったら、今の一撃で吹っ飛ばされていたところだ」

ペロニカはブラッドホーンヴァッファローの突進で崩された体勢を整えつつ、大盾を地面から引き抜いて構え直した。

「次はこちらからいくぞ」

体勢を整えたペロニカはブラッドホーンヴァッファローの側面に回り込んだ。そして渾身の一撃『シールドバッシュ』を叩き込む。

「グッガアアアア」

ブラッドホーンヴァッファローは口から血を吐き、苦痛の叫びを上げながら数メートル吹き飛ばされた。その場で倒れ込む。

「まだまだ、終わらねえぞ」

ペロニカは苦しみもがいて中々立ち上がれずにいる相手に追撃を仕掛ける。

「はっ、『スラッシュ』『スラッシュ』『インパクト』！」

ペロニカが放った攻撃により、遂にブラッドホーンヴァッファローは絶命した。

「ふう、ふう……中々手強い相手だった。少し魔力を消費しすぎたな」

ペロニカはポーチから魔力回復ポーションを取り出して一気に飲み干すと、その場を立ち去るのだった。

ペロニカがブラッドホーンヴァッファローを倒していた頃、東の戦場にアイリとイリアが到着した。ここにはエンシェントドラゴンのマールがいたため、有利な状況で戦いを進めていた。

王都クエールを目指していた巨人達は、人化を解いてエンシェントドラゴンへ変化したマール、そして五つ子狼のレイと聖女のマルティによるサポートに大苦戦しながら、少しずつ前進しようとする。

しかし、そんな巨人達のもとに突如、全てを吹き飛ばすような暴風と多種多様な魔法が雨のように襲いかかった。

「ん、なんじゃあの暴風と魔法は？ いったい誰が撃ったのじゃ」

突然の事に驚き、マールが動きを止めると背後から声がかかった。

「中々押しているじゃない。でも、マールさんだけだと大変だろうし、イリアと私の魔法でみんなの援護をしてあげるわ。そうすればマールさんがもつと前線に出られるでしょ」

アイリの声だった。

「なんじゃ。お前達であつたか。確かに、わしも前に出て戦えるのなら楽にこの戦場を蹂躪出来る。が、覚醒した真の賢者ならともかく、お主はまだ賢者見習いのようなものじゃろう。Bランクならいざ知らず、Aランクのモンスターにお主の魔法は通用するのだろうか？」

「ええ、その辺りは問題ないわ。ナビーにかけてもらった支援魔法がまだ効いているから。ナビー曰く、あと五時間くらいは効果が続くみたい」

「そうか、ではこれでこちらがさらに有利になったのじゃ。先程レイが進化してのう。Aランクモンスターのインフェルノウルフになったのじゃ。前線で戦っているイリアを見るに、どうやらそちらも進化したみたいだしのう。こちらには優秀な回復役もある事だし、楽勝なのじゃ。お主にかかっている支援魔法の効果が切れる前にかたを付けるとするかのう」

立ち読みサンプル はここまで

「優秀な回復役だなんて恐縮です」

マールに褒められ、マルティは謙遜する。

「へえ、イリアが進化したってよくわかったわね……って、あれだけ姿が変われば一目瞭然か。イリアはテンペストウルフになったのよ。無論、Aランクのモンスターよ。マルティ、マールさんに褒めてもらえて良かったわね。さてと、それじゃあ行きますか」

アイリのかげ声と同時に、マールは前に飛び出した。

翼を飛ばしたかせたマールは、巨人の群れの奥に見えるSSランクのモンスター——ギガントサイクロプス目がけて飛んでいく。

レイとイリアは、群れの最前列で重たい体を引きずるように歩いてくるトロールナイトなどのAランクモンスターを中心に倒すつもりようだ。

アイリは勝手に先行していつてしまったマールの後ろ姿を見つめて愚痴を言いつつも、ファイアドラゴンの角で作られた愛杖のレッドホーンを片手に構えた。

マルティが負傷した兵達がいる治療テントに残るので、テントを守るようにと前には出さない。

そして、先行するマール達を援護するために炎魔法『ボルカニックレイン』の準備を始めた。